

【参考資料】

渡部寛一郎関係文書目録（一）

渡部寛一郎文書研究会

（要木 純一、内田 融、大原 俊二、大國由美子、居石由樹子、
小林奈緒子、小林 啓治、竹永 三男、沼本 龍、本井優太郎）

摘 要

本稿は、若槻礼次郎の漢文・漢詩の師にして、彼の後援会・克堂会の会長でもあった渡部寛一郎に関する文書群「渡部寛一郎関係文書」（松江市新雑賀町・原洋二氏所蔵）の調査・研究を基礎として、近代山陰地域の漢詩文化と政党政治の関係を、日本近現代史・中国文学両分野の共同研究によって究明しようとするものである。この研究は、島根大学法文学部山陰研究センターの山陰研究プロジェクト「近代山陰の政治と文化—『渡部寛一郎文書』『若槻礼次郎関係文書』に見る漢詩と政党政治の関係分析を通して—」（課題番号1401、研究期間2014～2016）の最初の成果として発表するものである。そのため、渡部寛一郎および渡部寛一郎と若槻礼次郎の関係、近代山陰の漢詩文化についての基礎的事項を「解説」で示した上で、若槻礼次郎が渡部寛一郎に宛てて出した書簡の目録を掲載し、併せてその概要を「解説」で述べた。

キーワード：渡部寛一郎、若槻礼次郎、漢詩、政党政治、近代山陰地域

〔解説〕

一 渡部寛一郎と若槻礼次郎——「渡部寛一郎文書」の特長

現在、鳥根県庁前の庭園に若槻礼次郎の胸像が建っている。この像は、かつて松江市雑賀町の床机山上に建てられていたが、アジア太平洋戦争下に金属供出され、戦後1962年11月に現在地に再建されたものである。その床机山上の像に寄せられた顕彰碑文が、現在も胸像の前に据えられた花崗岩の側面に彫られている。その碑文は次のとおりである。

【史料1】

閣下生我郷幼學雜賀覺長入帝國大學積褐大藏省累進大臣遂為臺閣首班又以首席全權大使列倫敦會議依功授男爵如閣下實可謂一代偉人也於是有意相謀建立此像使人有所欽仰感奮焉

昭和九年六月吉辰

渡部寛一郎撰書

（書下し文）

閣下は我が郷に生まれ、幼にして雑賀覺に学び、長じて帝国大学に入る。大藏省に積

褐（仕官）して大臣に累進し、遂に台閣（内閣）の首班と為る。又首席全権大使として^{ロンドン}倫敦會議に列し、功に依って男爵を授かる。閣下の如きは、実に一代の偉人と謂うべし。是に於いて有志相謀って此の像を建立し、人をして欽仰感奮する所有らしむ。

若槻礼次郎（1866～1949）の経歴と功績を簡潔に示したこの文を撰んだのは、若槻礼次郎の漢学・漢詩の師であり、彼の個人後援会である克堂会の会長を務めた渡部寛一郎（1853～1938）であった。この渡部寛一郎については、彼が遺した膨大な文書群が松江市新雑賀町の原洋二氏（渡部寛一郎の曾孫）に伝えられており、原氏とその御父君の手によって、「日記」「来簡」「履歴」「漢詩」「教育」などに分類・整理され、一部は略目録の作成、書簡の翻刻などがなされている。

本研究会同人の内田融と竹永三男は、先年、原洋二氏を訪ね、丁寧に整理・分類された文書群を閲覧する機会を得たが、その後、原氏のご厚意によって、文書全体を写真撮影した上で保存管理措置を講じること、全点目録を作成するとともに、それらを研究に利用することについてご許可いただいた。原洋二氏のこのご厚意に対し、渡部寛一郎文書研究会として心から感謝申しあげる次第である。

先に福岡世徳文書研究会を組織して「福岡世徳文書」（松江市北堀町・福岡家所蔵）の研究に取り組んでいた研究会同人は、この史料群を得て、それまで進めていた山陰研究プロジェクト（山陰研究プロジェクト0803「初代松江市長・福岡世徳文書の解読・翻刻・研究と『初代松江市長・福岡世徳一史料と研究』（仮題）の刊行」研究期間2008～2010年度）を再編し、渡部寛一郎文書研究会を組織して新たな研究プロジェクトを開始した（山陰研究プロジェクト1103「近代松江の政治・文化史的研究—福岡世徳文書・渡部寛一郎文書の調査・整理・翻刻・分析を通して—」研究期間2011～2013年度）。この研究作業が進んで「渡部寛一郎文書」の全体が確認されると、その中の膨大な漢詩関係文書を前に、研究会同人は漢詩文に関する専門的知識の必要を痛感するに至った。というのは、渡部寛一郎は松江藩藩校修道館に学んで漢学を修め、漢詩を能くしたことから、松江・山陰を中心に全国に社員を有する漢詩結社・剪淞吟社の第二代社長を務めた人物であったからである（入谷仙介・大原俊二『山陰の近代漢詩』山陰の近代漢詩刊行会、2004年参照）。同時に、渡部寛一郎と彼の周りに集まる若槻礼次郎を始めとする人々にとっては、漢詩と「政治」とが結びついて存在していることを予感するに至った。

渡部寛一郎文書研究会は、以上のような経過で、要木純一・大原俊二という漢詩研究の専門家の参加を得るとともに、鳥根県出身の小林啓治の参加を得て、鳥根県域の政治史（政党政治史）研究の体制を強化し、組織したものである。研究会では今年度から要木純一を代表とする新たな研究プロジェクトを開始し（山陰研究プロジェクト1401「近代山陰の政治と文化—『渡部寛一郎関係文書』・『若槻礼次郎関係文書』に見る漢詩と政党政治の関係分析を通して—」研究期間2014～2016年度）、漢詩研究と地域政治史研究の統一的推進を図ることとしたのである。

渡部寛一郎の経歴の詳細は、別途「渡部寛一郎関係文書」中の履歴関係文書で明らかにするが、ここでは、その中の1点「履歴書概要」（目録番号3-5-24）によって、その一端を見ておこう。

【史料2】

履歴書概要

本籍 松江市新雑賀町一五の六番地

渡部寛一郎

嘉永六年十二月二十六日生

- 一 明治八年九月 本県師範学校ノ前身タル松江教員伝習校ニ就職以来本県男女師範学校及中学校教育ニ従事シテ明治廿一年十月ニ至ル
- 一 明治廿一年十一月、県下中等教育機関ノ不足ヲ補フ目的ヲ以テ私立学校ヲ創立シ進取学館ト称シ後私立中学修道館ト改称シ館主兼館長トシテ維持及管理ノ責ニ任シテ明治四十年三月ニ至ル
- 一 明治四十年五月、島根県立浜田高等女学校長ニ任ス（島根県）
- 一 明治四十一年五月島根県立浜田高等女学校長ニ任ス（内閣）
- 一 明治廿二年六月市制実施ノ際松江市名誉職参事会員ニ当選同廿四年六月満期解任
- 一 明治四十四年十二月叙従七位（宮内省）
- 一 明治四十五年三月依願免本職（内閣）
- 一 大正九年十一月松南教育会長ニ就任今日ニ至ル
- 一 大正十年六月松江市聯合教育会長ニ就任今日ニ至ル
- 一 大正十五年二月島根県会議員トナル

以上

右ノ通ニ候也

大正十五年五月 右 渡部寛一郎

この「履歴書概要」からは、教育家としての渡部寛一郎の姿が見えるが、前述のとおり彼は、その外に、剪淞吟社第二代社長に代表される漢詩人、県会議員・克堂会長という政治家でもあった。渡部寛一郎のこの姿が、「渡部寛一郎文書」の内容構成を特徴づけており、そこにこの文書群の意義がある。その一例が、次に紹介する、若槻礼次郎発渡部寛一郎宛書簡である。

【史料3】

若槻礼次郎発渡部寛一郎宛書簡（松江市新雑賀町・原洋二氏所蔵「渡部寛一郎文書」目録番号2-1-6。漢詩の書き下しは要木純一による）

〔封筒表〕松江市新雑賀

渡部寛一郎殿

侍史

消印・昭和三年二月二四日

〔封筒裏〕本郷上富士前町

若槻禮次郎

拜啓其後益々御健勝奉敬賀候御聲援之御蔭ニ而島根縣第一区民政党の全勝ト相成特ニ木村氏最高點ノ当選誠ニ難有感謝罷有候拙作次韻ノ高作ヲ賜ハリ難有感吟致候原作ハ

又追政戦上鬨車 (書き下し文) 又政戦を追いて鬨車に上り
雪夕霜晨説国家 雪夕霜晨国家を説く
体質瘦駘作獅吼 体質は瘦駘なるも獅吼を作し
唯期普選發精華 唯期す普選の精華を發するを
ニ有之候得共詩人ヨリ見レハ餘り露骨ナル様子ニテ左ノ如ク改作スル様助言ヲ受ケ候
小生ノ真意ト遠カリ面白カラス候得共平凡ノ詩トシテハ可然ト存候
追他角逐上鬨車 (書き下し文) 他の角逐を追いて鬨車に上り
説遍遠邇都費家 説いて遍し遠邇都鄙の家
梅雪扶吾獅子吼 梅雪吾を扶けて獅子吼せしめ
選良時節發精華 選良の時節精華を吐く

孰レニスルモ韻字ハ同様ニ候故御和作ハ其儘ニ而頂戴致候右御返答迄
匆々敬具

二月廿三日 禮次郎
桃蹊先生
侍史

1928年2月20日に立憲政友会の田中義一内閣の下で執行された第16回衆議院議員総選挙は、第一次加藤高明内閣(護憲三派内閣)期に成立した「普通選挙法」(大正14年5月5日法律第47号「衆議院議員選挙法改正法律」)によって行われた最初の総選挙であった。政府が与党を勝利に導くために激しい選挙干渉を行う戦前の総選挙では、政府与党が勝利するのが常例であったが、この選挙では与党の立憲政友会(当選217議席、落選125人)と野党の立憲民政党(当選216議席、落選126人)の議席数が伯仲するという結果に終わった(遠山茂樹・安達淑子『近代日本政治史必携』岩波書店、1961年)。若槻礼次郎が、自らの後援会・克堂会長である渡部寛一郎に宛てたこの書簡は、選挙結果が判明した時の興奮がさめやらない2月23日に書かれたもので、「島根縣第一区民政党の全勝」に象徴される民政党の大躍進を述べた上で、選挙戦と選挙結果に対する感懐を率直に表現した漢詩を添えている。そして、その率直な感懐が「餘り露骨ナル様子」であるとして「詩人」の「助言」を承けて改作しているのである。

この書簡に見られるように、若槻礼次郎が渡部寛一郎に送った書簡には、政治情勢・政治活動とそれを詠んだ漢詩もしくは生活の中で詠んだ漢詩が記されていることが常であった。本研究プロジェクトの第一の目的は、こうした若槻礼次郎書簡等の分析を通して、研究課題に掲げた「近代山陰の政治と文化」の関係を究明しようとするものである。

(竹永三男)

二 近代山陰地域の漢詩と政治

以上のような経過で発足した「渡部寛一郎文書研究会」が、今期の研究プロジェクトを進めるためには、その前提として近代の山陰地域における漢詩と政治の関係について、基礎的な検討を加えておくことが必要である。

そもそも、日本における近代漢詩は、明治期をピークとして衰えていったといわれている。しかし、山陰地域では事情は異なっている。山陰の漢詩人たちは、漢詩がやがて衰えていくのではないかという危機感を、自分たちが結集することによって乗り切ろうとしたのであり、その結果、大正期から昭和初頭にかけての一時期、活動の成果ともいえる大輪の花を開かせたのである。

その活動の中心となったのは、島根県松江市に本拠を置く漢詩人の結社、剪淞吟社である。詳細については『山陰の近代漢詩』（入谷仙介・大原俊二）に詳しい。「剪淞吟社史稿」（入谷）によれば、「剪淞吟社は明治三六年（一九〇三）から、昭和一〇年代の末ごろまで、ほぼ四〇年にわたり、松江に存在した漢詩人の結社」である。その概要は、明治36年（1903）3月22日、東京から森槐南が帝室および出雲大社の儀式制度の調査のために来県した折に、旧知の村上琴屋ほか7名と島根県知事井原天游（昂）が、槐南を松江の松崎水亭へ招き、歓待した席上で新詩社剪淞吟社を創立した。いわば、槐南を結晶核として誕生させた。その後、明治44年（1911）に槐南が没すると、今度は大正4年（1915）6月、永坂石埭の「碧雲湖棹歌」の石碑を宍道湖上の嫁ヶ島に建立して、中央とのつながりを保った。

一方、明治41年（1908）11月、山陰鉄道米子・松江間の開通を機に第1回「山陰大詩会」が鳥取県米子町で開催された。「鳥取県下の漢詩吟社」（大原）によれば、大詩会は昭和10年まで原則として年に1回、通算27回、松江、安来、境港、倉吉、大社、鳥取、玉造、大田、浜田、城崎等で毎回世話人・開催場所を変えておこなわれた。出席者は記録の残る22回に677名、作品参加者は23回に338名、合わせると1,000名（延べ人数）を超えて大会を盛りあげた。

剪淞吟社は、さらに大正6年（1917）5月、漢詩雑誌『剪淞詩文』を発行した。そして昭和10年（1935）10月まで18年間に143号を発行したことについては、「漢詩雑誌『剪淞詩文』（入谷）に詳しく、その中で入谷は、このような漢詩雑誌は、地方の小都市では他に例がなく、「その投稿者も山陰二県にとどまらず、東京から九州に至る全国的な範囲に渡り、東京・名古屋と対峙して、漢詩壇を三分していたとさえいえる」と述べている。

こうした要因がかさなって、剪淞吟社創立の際、8名であった社員は、大正4年、石埭の嫁ヶ島詩碑の建立のときでもわずかに12名にすぎなかったが、『剪淞詩文』を発刊するやいなや大正9年（1920）には100名を超えた。昭和年代に入ると、さらに150名を超える規模にまでふくれあがって、漢詩壇を牽引して山陰に一大漢詩文化圏を形成した。

しかし、昭和10年代になると、漢学の素養を持った、高齢化した漢詩人たちが相次いで逝去してゆき、花がしほむように急速に活動は終息していった。

わずか40年余りの間に、松江を中心として山陰全体に華麗な花を開き、散っていった漢詩文化を、人と人との繋がりという観点からみれば、漢詩がそれぞれの人と人との関係を取り持って、それをより強く深めているように見える。それは、ある一つの漢詩作品に対して、その作品に用いられている押韻と同じ韻を用いて、唱和して原作者に贈るという、漢詩の応酬の作詩慣習が近代漢詩に多く認められるからである。

また、漢詩は日本の近代詩とは違い、中国古代から「詩は志なり」（詩経）と言われているように、自分の思い決めた心情を詠ずるものであった。たとえば、「幕末の志士たちが自分の慷慨

を漢詩に託して詠じたように、漢詩は政治にコミットする文学たることを期待されていた」(『近代文学としての明治漢詩』入谷仙介)。だから山陰地方では、人と人との繋がりの中に、漢詩と近代日本の政治との融合があったとしても、それは当然のことであるといえよう。(大原俊二)

三 「若槻礼次郎発渡部寛一郎宛書簡」の概要

渡部寛一郎文書研究会では、前掲の「渡部寛一郎文書」の調査を進めているが、その過程で若槻礼次郎のまとまった書簡群を確認したので、中間報告として以下に略述する。

(一) 現在把握している若槻礼次郎書簡

渡部寛一郎に関わる文書群は所蔵者による整理を経て、そのほとんどは複数の箱に収納される。研究会のナンバリング作業により箱番号2を付された箱は書簡群を収納しており、その中のクリアファイル一冊と茶封筒一袋に、若槻礼次郎に関係する文書がまとめられている。箱2以外の箱にも若槻礼次郎書簡が含まれている可能性を残すが、ファイル収納のようなまとまりを持ったものは確認されていない。

(二) 形態と点数

形態は、封書が主体であるが、他に絵葉書、詩箋、切紙、新聞記事切り抜きなどがあつた。写真撮影にあたって、クリアファイルのポケットに収められている現状をそのまま反映させる意図をもって個別の文書にナンバリングを行った。このナンバリングは、左端に箱番号の2、ハイフンを挟んで、クリアファイル収納分には1、茶封筒収納分には2の親番号を与え、さらにハイフンを挟んで、収納順に個別文書の番号を1から付し、一つのポケットに複数の文書が収められている場合などには適宜ハイフンを挟んで枝番号を付した。この作業により、若槻礼次郎書簡群には、2-1-1~53・2-2-1~10の番号が付され、枝番号を含めて74点を数えることになった。

このなかには新聞記事の切り抜きや他筆書簡等も含まれており、それらを除き若槻礼次郎発信分のみに限ると文書点数は56点となる。封書との共伴関係が不分明な詩箋などは一紙を1点と数えている。また封筒消印と中身の書箋記載日付の不一致がみられるケース、封筒のみで中身の書箋が未確認のケースがあり、前者は不一致のまま一点と数え、後者は除いた。このような理由により、文書点数は書通の回数を厳密には示さず、目安としての数字である。なお、封書のうち2点については、乾式コピーによる複写物と釈文があるものの原文書は確認されなかった。これら若槻礼次郎発信分の概要は後掲一覧表を参照されたい。

付言すると、他筆の内訳は、若槻徳子(礼次郎妻)4点、渡部寛一郎3点、国府犀東1点、牧野鉄箋1点、未詳5点(この5点は同筆。大正十五年九月二十一日柳光亭雅集に関わる漢詩を記した切紙で、4点は若槻の詠詩。)である。

三、年代域

若槻礼次郎書簡の年代域は1913年(大正2)から1938年(昭和13)である。推定も含めた年別の文書点数の内訳を示すと、次表のとおりである。

| 年次 | 点数 |
|------------|----|
| 1913年 | 1 |
| 1914～1921年 | 0 |
| 1922年 | 12 |
| 1923年 | 0 |
| 1924年 | 8 |
| 1925年 | 4 |
| 1926年 | 1 |
| 1927年 | 5 |
| 1928年 | 3 |
| 1929年 | 3 |
| 1930年 | 3 |
| 1931年 | 3 |
| 1932年 | 1 |
| 1933年 | 3 |
| 1934年 | 1 |
| 1935年 | 0 |
| 1936年 | 3 |
| 1937年 | 0 |
| 1938年 | 2 |
| 年未詳 | 3 |

渡部寛一郎は1938年に没しており、二人の間の書通は寛一郎が亡くなるまで続いたことがわかる。

書簡群のうち最も古いものは1913年である。この年に若槻は政党活動を始めており、若槻にとって画期をなす年ではあるが、二人の書通が始まった時期は、さらに遡ると考えられる。渡部寛一郎文書の中には、寛一郎の自筆日記が1897年（明治30）から残るが、同年2月16日条には、上京中の寛一郎が若槻の自宅を訪問した記事がみられる。あいにく若槻本人は不在であったが、夫人に面会し一時間弱の談話に及び他日を約して帰ったという【史料4】。また同年2月23日条には、京橋区竹川町（銀座）の料亭に同郷の人々と居ると、若槻と岸清一も偶然同所において同じ席にやってきて歓談したことが記されている【史料5】。このような二人の関係を踏まえると、書通はすでにこの頃あったとみなした方がよいのではないか。

また、1914～21、1923、1935、1937年の書簡を見出せていないが、実際に書通がなかったとは考えにくい。例えば、1920年は若槻の地元後援会克堂会が寛一郎を会長にして発足した年であり、若槻は帰県し発足式に出席しているし【史料6】、1935年には寛一郎撰の碑文を伴った若槻の銅像が松江市の床几山に建てられており、若槻は除幕式に出席している【史料7】。このような背景を持つ時期には、二人の間に書通があったと推測する方が自然と思われる。

つまり書通の頻度に疎密はあったとしても、現時点で確認している渡部寛一郎文書の中に伝存する若槻書簡と書通の実態には乖離があるとみなすべきだろう。今後調査が進めば、その差分を埋める書簡が新たに見いだされる可能性のあることに留意しておきたい。

【史料4】 渡部寛一郎「日記」(抜粋)

明治三十年二月十六日条

午後三時頃ヨリ車ヲ乗シ清水彦五郎、若槻礼次郎二氏ヲ訪問、共ニ不在、夫人ニ面会、互ニ久闊ヲ叙シ談話各一時間弱、他日ヲ約シテ辞帰、正ニ黄昏

【史料5】 渡部寛一郎「日記」(抜粋)

明治三十年二月二十三日条

京橋区ニ三人ト別レ徐ニ散歩ノ后、竹川町花月楼ニ至ル、志立氏ノ案内ニヨル、同席者園山、雨森、成瀬、清水彦五郎四氏、偶岸、若槻二氏同楼ニ在リ、亦来席、談新旧ニ涉リ興ヲ盡シテ帰ル

【史料6】 渡部寛一郎「日記」(抜粋)

大正九年三月十九日条

若槻氏来談、午後大場邨出浮一泊

同年三月二十日条

若槻氏大場邸巡遊セシニ付、大森善次郎氏方ニテ会見

同年三月二十五日条

此日午後克堂会発会式ヲ城山興雲閣ニ举行セシニ付出席

同年五月七日条

午前出掛ニ若槻氏ヲ皆美館ニ訪問

同年五月八日条

午前若槻氏ヲ訪問且其帰京ヲ見送り

【史料7】 渡部寛一郎「日記」(抜粋)

昭和十年4月1日条

午後芳子〈寛一郎次女〉同伴、若槻君一行ヲ皆美館ニ出迎タリ

同年四月二日条

此日若槻君夫妻同伴来訪、此日同君一行歓迎会（啓次郎〈寛一郎次男〉代理参列セシメタリ）

同年四月三日条

此日床几山頭若槻君寿像除幕式、啓次郎代理参列セシメタリ

同年四月五日条

此夕臨水亭ニテ克堂君歓迎詩会開催出席（早退帰宅）

同年四月六日条

此夜八時若槻君夫妻出發帰京ノ途ニ就ク、駅頭啓次郎芳子兩人見送ラセタリ

（居石由樹子）

【表2】若槻禮次郎書簡概要 (仮) (居石由樹子作成)

<凡例>

- ①番号 若槻書簡を年代順に排列し番号を付した
 ②撮影番号 写真撮影時に現在の収納状況に則して番号を付した
 ③年月日 書簡日付・封筒消印・内容からの推測により年月日を付した
 ④形態 文字の記された媒体の区別を記した
 ⑤所在 文書の発信地を差出住所、消印等により記した
 ⑥内容 書簡の内容要旨を適宜抄録した
 ⑦自詠漢詩 書面に若槻の自詠漢詩があれば冒頭4文字を摘記した
 ⑧桃溪とあるは渡部寛一郎の号

| 番号 | 撮影番号 | 年月日 | 形態 | 所在 | 内容 | 自詠漢詩 | 備考 |
|----|---------|----------|-----|-----------|---|-------------------------|---------------------|
| 1 | 2-1-53 | T020530 | 封書 | 東京/麹町十六番町 | 貴地方出向の節の厚遇を謝す。政党運動は初陣につき同郷先輩の援助を切望す。 | | 桃溪は浜田町在住 |
| 2 | 2-1-40 | T110307 | 封書 | 東京/砂土原町 | 政友会・内閣の動搖、貴族院による攻撃など注視を願う。委任会連記の克堂質問部分はいずれ送付す。佐藤喜八郎へ健康如何伝声願う。詠詩供覧 | 不是蝸牛… | |
| 3 | 2-2-1 | T110613 | 封書 | 東京/砂土原町 | 政友会内閣辞表奉呈につき所感。憲政及び国家民人のために努力したく後援を願う。 | | 複写 |
| 4 | 2-1-9 | T110720 | 封書 | 東京/砂土原町 | 克堂会支援、帰松中の厚遇を謝す。舞鶴・大津・奈良の遊説盛況。詠詩供覧 | 歌浦煙波… 報国只存… 黒雲驅雨… | 「歌浦…」中に「学謫仙」とみえる |
| 5 | 2-1-13 | T110721 | 封書 | 東京/砂土原町 | 佐藤喜八郎へ伝言願う、特に銅像一件につき。克堂会・殿町倶楽部出席員宛の挨拶状名簿送付を依頼す。詠詩供覧 | 黒雲出岫… | 先に送る奈良即興の平仄の違い等あり改作 |
| 6 | 2-1-35 | T110802 | 封書 | 東京/砂土原町 | 三十一日帰京、六日より九州四国へ出発 (変更カ)、帰宅は来月の予定。克堂会人心の和を失わないよう調節を願う。 | 育英養俊… 懶逐炎涼… | |
| 7 | 2-1-22 | T110906 | 封書 | 東京/砂土原町 | 一昨日姫路入り演説の後姫路城辺一巡、旅館で同志と宴、夜帰京。詠詩供覧 | 晚白鷺城… 納涼共酌… | |
| 8 | 2-1-2-4 | T110916 | 絵葉書 | (絵葉書は函館) | 詠詩供覧 (「…西走東奔…」) | 奈何治道… | |
| 9 | 2-1-1-1 | T111???? | 絵葉書 | 北海道/野付牛 | 根室行軍中の詠詩供覧 (「…百合花…」) | 秋入茂林… | |
| 10 | 2-1-2-1 | T111??28 | 絵葉書 | (絵葉書は阿寒湖) | 追分曲を聴く。詠詩供覧 | 高洲忍路… | |
| 11 | 2-1-1-4 | T111105 | 絵葉書 | 愛媛/松山 | 正岡 (カ)ら諸友と吉田に遊ぶ。詠詩供覧 | 晴川漁獲… 日北風和… | 「晴川…」中に「学醉仙」とみえる |
| 12 | 2-1-36 | T111203 | 封書 | 東京/砂土原町 | (詠詩3首のみ) | 月白風清… 何用中流… 誰言呉城… | |

| 番号 | 撮影番号 | 年月日 | 形態 | 所在 | 内容 | 自詠漢詩 | 備考 |
|----|----------|---------|-----|-------------------|---|---|--|
| 13 | 2-1-37-1 | T11???? | 詩箋 | | (詠詩1首 題詞に「坡老後遊之日賦」を桃蹊と佐藤喜八郎に呈す旨記す) | 巨口細鱗… | 蘇東坡「後赤壁賦」にちなむ、「十月望」 |
| 14 | 2-1-3 | T130131 | 封書 | | 佐藤武一郎より来書。佐藤喜八郎立候補断念を思慮す。候補者への資金補助に關する見解 (T13カ、暫時ここに置く) | | 複写 封筒不一致カ (消印は駒込7.2.1) |
| 15 | 2-1-29 | T130301 | 封書 | 東京/砂土原町 | 松江市佐藤球三郎擁立説得・三区木村小左衛門擁立につき高橋と相談を依頼す。五区俵孫一、島田俊雄四区に回るを承諾せず候と争うことに。 | 本見神州… | 富士山の桃蹊詩に次韻 |
| 16 | 2-1-12 | T130330 | 封書 | 大阪/堂島 自由亭 | 楯松中の厚配を謝す。松江市候補佐藤球三郎支援、佐藤喜八郎の活動につき桑原との協議を乞う。石見大田福田孫太郎に邂逅。信太浜北に書通。詠詩供覧 | 天邊雪色… 豊公雄略… | 浜北に添削を乞い、改作。その旨伝言 (桃蹊→浜北) を依頼 |
| 17 | 2-1-48 | T130919 | 封書 | 東京/砂土原町 | 佐藤喜八郎察後追悼文代読を謝す。予算問題により帰松予定延期。来月二十二、三日頃帰松。来書を通り売豆紀神社参拝・小学校出席とす。御意ありがたく感吟。御推賞の詩句は却って赤面す。 | | |
| 18 | 2-1-52 | T131008 | 封書 | 東京 (消印 司法省) | 十月十一日柳橋柳光亭にて後の月を観る小宴を設けたく臨席を切望す。偶樊榭九月十三日夜月詩の韻を用いた五律の持参を願う。 | 佳会迎仙… 詩興如雲… | 桃蹊上京中 偶樊榭「夜静楼陰…」 |
| 19 | 2-1-7-2 | T13???? | 詩箋 | | (詠詩2首 題詞「甲子古曆九月十三夜觀月会 柳光亭席上賦二律」) | 鶴駕北巡… | 内務大臣として陪從 |
| 20 | 2-1-1-2 | T131107 | 絵葉書 | 石川/金沢 | 陸軍特別大演習閱兵式行啓の詠詩供覧 | 柳密何妨… | 拙作三首とあるがみえず |
| 21 | 2-1-41 | T131210 | 封書 | 東京/砂土原町 | 二宮別荘滞在の松浦厚より天空海閣樓觀月詩集を贈られ、七絶を返す。詠詩供覧 | | |
| 22 | 2-1-25 | T140105 | 封書 | 東京/砂土原町 | 旧臘盲腸炎の見舞に謝す。詠詩供覧 (漢詩みえず) | 三依松洲… 憂国至情… | |
| 23 | 2-1-1-3 | T140408 | 絵葉書 | 静岡/興津 | 昨日興津に來下、本日勝地巡遊、夕帰京予定。詠詩供覧 | 星陵趁清… 詞友無塵… 飛江断送… 秉燭夜遊… 苦吟獨漏… | 昨年柳光亭雅会 星岡茶寮詩会 客秋鸞洲伯爵觀月筵を天 空海閣樓に開く 「飛江…」中に「学酒中 仙」 |
| 24 | 2-1-17 | T140510 | 封書 | 東京/外桜田 町官舎 | 松江市會議員選挙勝利を謝す。昨年柳光亭雅会参会者により八日星岡茶寮にて詩会、松浦厚とともに賓客。小冊子入手次第送付。詠詩供覧 (うち一は信太浜北添削)、全部への浜北の批評を求む。 | | |
| 25 | 2-2-5 | T141006 | ガリ版 | | 三十日陰曆九月十三夜にあたり柳橋柳光亭雅集へ臨席願う。古人の詩韻による詩を示されたし。 | 窮達世途… 不是矜奇… 只合江湖… | 趙嘏「獨上江樓…」 賈至「楓岸紛紛…」 |
| 26 | 2-1-5 | T15???? | 活版 | | 華甲自寿 (還曆の自詠詩3首) | | |

| 番号 | 撮影番号 | 年月日 | 形態 | 所在 | 内容 | 自詠漢詩 | 備考 |
|----|----------|---------|-----|----------------|---|--|---|
| 27 | 2-1-32 | S021005 | 封書 | 東京/上富士前町 | 桃蹊詩に次韻の詩を草し国府犀東の添削を乞うと、詩を寄せられる。別紙にて供覧 | | 国府犀東の詠詩2首を記した詩箋1紙あり2-1-33-2、2-1-32・33-1とともに封筒一括 |
| 28 | 2-1-33-1 | S021005 | 詩箋 | | (自詠詩 桃蹊詩の韻に次す) | 嶼樹湖雲… | 2-1-32に添付の別紙 |
| 29 | 2-1-18 | S021027 | 封書 | 京都/柘家旅館 | 昨日の見送り・帰県中の厚遇・送別詩を謝す。汽車中作の詠詩供覧 | 満喫人間… | |
| 30 | 2-1-47 | S02???? | 継紙 | | 帰県中の厚意に鳥取より謝すも重ねて礼。帰県中の詩に犀東の添削を得る。詠詩供覧 | 嶼樹湖雲… 楓葉莊花… 故旧来迎… 詩友携登… 豈翅詩宴… 不願青雲… 周文乎文… 把臂新知… 交友何論… 滿喫故国… | 剪湊吟社雅集 次韻(桃蹊・石州客・右田咄洲) |
| 31 | 2-1-30 | S021104 | 封書 | 東京/上富士前町 | 今月中在京予定なれど香川県より出張要請考慮中。□富二十五年忌法要費用寄附。帰県中の作詩は取りまとめ供したか、なお追加の詩1首供覧 | 妙技阿誰… | 荒川嶺雪の妙技に寄せる詩 |
| 32 | 2-1-6 | S030223 | 封書 | 東京/上富士前町 | 島根県第一区民政党全勝、木村小左衛門最高点当選につき声援を謝す。詠詩供覧 | 又追政戦… 追他角逐… | 詩人の助言により改作 |
| 33 | 2-1-10 | S030911 | 封書 | 東京/上富士前町 | 七月末より片瀬転地、昨日帰京。床次脱党はじめ民政党近況。山崎軍助面会詰。内村(鱸香)先生贈位につき内務次官潮恵之輔に配慮求む。詠詩供覧 | 交情潭々… 興色揮毫… 小廬占此… 潮痕消得… 霄漢志消… | 若槻の詩は負喧庵小集での詠詩 |
| 34 | 2-1-2-3 | S031106 | 絵葉書 | 東京/小石川(上富士前町カ) | 来八日京都行予定。衣欄通丸太町上ル杉本徳治郎方 | | |
| 35 | 2-1-19 | S040329 | 封書 | 東京/上富士前町 | 議會中につき紹介の人物に面会せず。施設寄附金については様子見。喜寿祝の詠詩供覧 | 遙想松江… | 「遙想松江賀宴…」 桃蹊自寿詩に次韻 |
| 36 | 2-1-38 | S040725 | 封書 | 神奈川/片瀬西浜 | 十七日より負喧庵に滞留。大江香峰北海道鉄道局長栄転につき当庵にて同人五、六人で送別詩会二十八日頃に予定。 | | |
| 37 | 2-1-15 | S041016 | 封書 | 東京/上富士前町 | 山陰大詩会の高作拝吟。ロンドン会議全権就任の決意および渡航予定通知。 | | |

| 番号 | 撮影番号 | 年月日 | 形態 | 所在 | 内容 | 自詠漢詩 | 備考 |
|----|----------|---------|----|----------|---|---|---------------------|
| 38 | 2-1-23 | S050920 | 封書 | 東京/上富士前町 | 先祖供養のため三十日発城崎一泊、十月二日松江着帰郷予定。古中秋観月筵出席は希望するも未定。詠詩供覧 | 山陰風物… 山陰風物… 災後難營… 火輪一過… 迎我歡呼… 煙波縹渺… 島影湖光… 水閣遶吾… 只合凋埃… 臨水吟詩… 金鳳玉露… 翠色滴塔… 蕎麵盛來… 欧西半載… 時會放交… 讀史皆暗… 幾度渚禽… 鞍馬山深… 松翠稻黃… | 松江にて観月筵 (出席未定) |
| 39 | 2-1-27 | S051022 | 封書 | | 帰郷中の厚意に謝す。高橋菊徑へ伝言願う。詠詩供覧 (城崎温泉・山陰遶上・松江・松崎小亭・臨水亭く古中秋観月)・宍道湖・出雲大社・石州大田・浜田・玉造・屋島・鞍馬山・宇治) | 封筒不一致 (消印は牛込13.8.□8) 松崎亭・臨水亭・玉造で詩会 | |
| 40 | 2-1-39 | S051228 | 封書 | 東京/上富士前町 | 粗餐を差し上げたが、元日か二日から十八、九日まで伊東古風庵予定。その後の御都合を伺いたいだが、民政党の用事・議会の用事・首相療養中等につき予定見えず。詠詩供覧 | 湘南一夜… 奈笑庵前… 洞前來齋… | 桃蹊上京中 |
| 41 | 2-1-44 | S060114 | 詩箋 | 静岡/伊東町 | (自詠詩 桃蹊詩に次して答える) | 淡雲潤水… | |
| 42 | 2-1-43-2 | S060121 | 詩箋 | | (自詠詩 奈笑書屋 (自宅内) に桃蹊・鉄篋を迎えた喜びの賦) | 遶得双星… | |
| 43 | 2-1-26 | S060126 | 封書 | 東京/上富士前町 | 先日のお来訪に謝す。同日分韻の詠詩供覧 | 來叩溪頭… 凹谷道人… 品座晴窓… | 桃蹊上京中 |
| 44 | 2-1-20 | S071017 | 封書 | | 村上琴屋訃報を伊東で聞き驚く。追悼詩供覧 | 秋天星墜… | 封筒不一致 (消印は駒込8.3.23) |
| 45 | 2-1-21 | S080118 | 封書 | 東京/上富士前町 | 来訪時不在を詫び、二十一日に招く。同日牧野鉄篋も案内。 | | 桃蹊上京中 |
| 46 | 2-1-24 | S080509 | 封書 | 東京/上富士前町 | 先便で送った自作詩の葛見神社老樞建碑詩への問い合せに回答。雑賀小学校創立六十周年の高作に次韻の詠詩供覧 | 扶冊垂髻… | 雑賀小学校六十周年の桃蹊詩に次韻 |

| 番号 | 撮影番号 | 年月日 | 形態 | 所在 | 内容 | 自詠漢詩 | 備考 |
|--------|---------|---------|----|-----------|---|---|--|
| 47 | 2-1-8 | S081208 | 封書 | 東京/上富士前町 | 見舞、特に同情の詩に謝す。剪菴吟社への寄附送金。詠詩供覧 | 関心家国… 葵心何故… 人間処世… | 剪菴吟社寄附 |
| 48 | 2-1-7-1 | S090329 | 封書 | 静岡/伊東町 | 夫婦ともに肺炎、転地静養中。詠詩供覧 | 仰見明時… 聞目三分… 節遅三月… 連句祈雨… 不羨揚州… | |
| 49 | 2-1-16 | S110127 | 封書 | 東京/上富士前町 | 昨年十一月来風邪により臥床。十二月二十五日より伊東転地、本日帰宅。高作鉄篋に転送。新年詠詩供覧 | 叨浴恩波… 盈拜以進… | 桃蹊詩を牧野鉄篋に送付 |
| 50 | 2-1-28 | S110128 | 封書 | 東京/上富士前町 | 桃蹊詩を牧野鉄篋に送ったところ来月『花香月影』に掲載との来書あり。 | | 若槻宛牧野鉄篋書簡あり |
| 51 | 2-1-14 | S110414 | 封書 | 静岡/伊東町 | 昨日牧野鉄篋・谷口廻瀾来訪。本日落手の桃蹊書簡を牧野に回送す。昨日小集の詠詩・今回滞在中の詠詩供覧 | 寒波似為… 誰是主人… 避寒追暖… 野莊風物… | 「寒波…」「誰是…」は古風庵小集での詠詩、後者は湯河元臣の訪問を回想したもの 「野莊」は牧野鉄篋詩に次したもの |
| 52 | 2-1-50 | S130312 | 封書 | 静岡/伊東町 | 松江発の電報姓のみにて名前なきも桃蹊永眠の知らせと察す。痛恨事。郵便小為替にて金十円送付、お供え願う。 | | |
| 53 | 2-1-4 | S1305?? | 詩箋 | | (自詠詩 渡部桃蹊追悼詩) | 儒林遠邇… | |
| 以下 年未詳 | | | | | | | |
| 54 | 2-1-11 | ???0321 | 封書 | 静岡/伊東町 | 津森老人を悼む。三月三日駒込拙宅に雅客小集、唱和および古風庵雑詠への次編別冊供覧。東久世伯(通敏カ)扁額にちなみ古風庵と称す。 | | 駒込自宅小集 |
| 55 | 2-1-34 | ???0807 | 封書 | 山梨/山中湖畔 | 去月二十二日より当地滞在。片瀬の別荘売却により今春より着手し当地に別荘を構え、半月荘と命名。詠詩供覧 | 新構茅廬… 各復蠹蝨… 枯枝乾葉… 山影在湖… | 山中湖畔別荘入手はS09カ(「忙中間草」による) |
| 56 | 2-1-46 | ??????? | 半紙 | (神奈川/片瀬カ) | (自詠詩 題詞「負喧庵雑詠之一」) | 冒暑庭前… | |

附 若槻徳子書簡

| 番号 | 撮影番号 | 年月日 | 形態 | 所在 | 内容 | 自詠漢詩 | 備考 |
|----|---------|---------|-----|----------|--|------|----------------------|
| 1 | 2-1-42 | T150208 | 封書 | 東京/外桜田町 | (総理大臣) 親任に対する祝辞、宅への注意、奥様よりの鯛を謝す。 | | |
| 2 | 2-1-49 | S050202 | 封書 | 東京/上富士前町 | 卯子焼の送付を謝す。望湖楼のもの美味、老人の気に入る。田原・嫁等に福わけす。 | | |
| 3 | 2-1-2-2 | S060524 | 絵葉書 | 東京/上富士前町 | 大好物の御祝を三家にて賞味。御礼 | | |
| 4 | 2-1-51 | ???0507 | 封書 | ? | 甘鯛の恵投を謝す。 | | 封筒不一致 (消印は中野14.10.4) |

The List of Works of Watanabe Kanichiro(1)

Research Project on Works of Watanabe Kanichiro

[Abstract]

Watanabe Kanichiro was the teacher and the chief support of Wakatsuki Reijiro, the Prime Minister, and also he was a famous Chinese poem composer. This List is that of the letters from Wakatsuki Reijiro to Watanabe Kanichiro.

Keywords : Watanabe Kanichiro, Wakatsuki Reijiro, Chinese poem